

日蓮大聖人御書全集

きょうおうどのごへんじ

経王殿御返事

新版
1632
ゝ
1633

きようおうどのごへんじ

経王殿御返事

ぶんえい ねん がつ にち さい しじようきんご

文永10年(73) 8月15日 52歳 (四条金吾)

ご おん 音 信 聞 そうら

その後、御おとずれきかまほしく候いつるところに、わ

ひと た そうろう なに ちようほう 銭

ざと人をおくり給び候。また、何よりも重宝たるあし、

さんかい たず にちれん み とき あ たいせつ そうろう

山海を尋ぬるとも、日蓮が身には時に当たりて大切に候。

きようおうごぜん にろくじちゆう にちがつてん いの

それについて、経王御前のこと、二六時中に日月天に祈

もう そうろう せんじつ 守 ざんじ み 離 持 たま

り申し候。先日(のまぼり、暫時も身をはなさずたもち給え。

ほんぞん しようほう ぞうほうにじ なら ひと

その本尊は、正法・像法二時には、習える人だにもなし、

書 あらわ たてまつ 絶 ししおう ぜんさんごいち

ましてかき顕し奉ることたえたり。師子王は、前三後一

もう

蟻

こ と

猛

と申して、ありの子を取らんとするにも、またたけきもの

と

とき

勢

い

同

を取らんとする時も、いきおいを出だすことは、ただおなじ

にちれん

しゅご

ごほんぞん

認

まい

きことなり。日蓮、守護たるところの御本尊をしたため参ら

そろう

ししおう

劣

きよう

い

しし

せ候ことも、師子王におとるべからず。経に云わく「師子

ふんじん

ちから

奮迅の力」とは、これなり。

まんだらよ

よ

しん

たも

また、この曼荼羅能く能く信ぜさせ給うべし。

なんみようほうれんげきよう

ししく

やまい 障

南無妙法蓮華経は師子吼のごとし、いかなる病さわりをな

きしもじん

じゅうらせつによ

ほけきよう

だいもく

たも

すべきや。鬼子母神・十羅刹女、法華経の題目を持つもの

しゅゐ

み

幸

あいぜん

ふく

を守護すべしと見えたり。さいわいは愛染のごとく、福は

びしやもん

ところ

あそ

戯

毘沙門のごとくなるべし。いかなる処にて遊びたわぶると

恙

ゆぎよう

おそ な

ししおう

も、つつがあるべからず。遊行して畏れ無きこと、師子王の

じゆうらせつによ

なか

こうだいにゆ

しゆご

深

ごとくなるべし。十羅刹女の中にも、皐諦女の守護ふかか

ごしんじん

剣

るべきなり。ただし御信心によるべし。つるぎなんども、

進

ひと

もち

ほけきよう

つるぎ

すすまざる人のためには用いることなし。法華經の剣は、

しんじん

健 氣

ひと

もち

おに

金

棒

信心のけなげなる人こそ用いることなれ。鬼にかなぼうた

にちれん

魂

墨

染

流

そうろう

るべし。日蓮がたましいをすみにそめながしてかきて候

しん

たま

ほとけ

みこころ

ほけきよう

にちれん

ぞ、信じさせ給え。仏の御意は法華經なり、日蓮がたまし

なんみようほうれんげきよう

過

みようらくい

いは南無妙法蓮華經にすぎたるはなし。妙樂云わく

けんぽんおんじゅ

いのち

しやく

たも

「頭本遠寿をもつてその命となす」と釈し給う。

きようおうござん

禍

てん

さいわ

経王御前には、わざわいも転じて幸いとなるべし。

相 構

ごしんじん

い

ごほんぞん

きねん

たま

あいかまえて御信心を出だし、この御本尊に祈念せしめ給

なにごと じゅうじゅ

がん

じゅうまん

え。何事が成就せざるべき。「その願を充滿すること、

しょうりよう

いけ

げんせあんのん

のち

ぜんしよ

しょう

清涼の池のごとし」「現世安穩にして、後に善処に生ぜ

うたが

ん、疑いなからん。

もう

そうろう

とうごく

だいなん 許

そうら

また申し候。当国の大難ゆり候わば、いそぎいそぎ

かまくら

のぼ

げんざん

ほけきよう

くりき

おも

そうら

鎌倉へ上り、見参いたすべし。法華経の功力を思いやり候

ふろう ふ し もくぜん

なげ

ろめい

えば、不老不死目前にあり。ただ歎くところは露命ばかり

なり。てん天たすけ給えと強盛たまたに申し候。じようとくふじん浄徳夫人・竜女
あとの跡をつがせ給え。たま南無妙法蓮華經、なんみょうほうれんげきよう南無妙法蓮華經。なんみょうほうれんげきようあ

なかしこ、あなかしこ。

はちがつじゅうごにち

八月十五日

にちれん

日蓮

かおう

花押

きようおうごぜんごへんじ

經王御前御返事